

## 学位論文の要約

論文題目 現代中国語の新語における日本語からの借用語についての研究

申請者 呂 雨珊

本論文は主に 2000 年以降の現代中国語の新語における日本語から借用語を分析対象として考察を行った。今まで研究対象としてあまり扱われなかった動画コメントコーパスを作成し、実際に使用されている日本語借用語の新語や用法を整理し、その言語的特徴を分析した。最後は言語接触の視点から現代中国語における日本語借用語の受容の過程を解明した。

第 1 部は本論文の導入部分である。主に述語の定義、研究目的および研究方法、先行研究の概要を述べ、本論文の位置付けを提示した。

第 2 部では、日本語借用語そのものについてさらに詳しく考察した。第 3 章では、ドイツ語を中心とする印欧諸語の借用語に関する Betz の分類法や王 (1958)、高・劉 (1958) と Federico Masini (1997) の中国語の借用語に関する研究を基に、現代中国語における日本語からの借用語を「音訳借用語」、「音訳兼意識借用語」、「原語借用語」、「意味借用語」、「意識借用語」、「部分意識語」と「部分修正語」の 7 種類に分類した。更に、「部分意識語」という新しい概念を提起して分析した。全体的に見ると、意形借用語の数が一番多い一方で、「音訳借用語」の数がわずか数例しかない。特に「牙白 (ヤバい)」、「麻吉 (マジ)」などのような抽象的な意味を表す音訳借用語が一時の流行語として使われたが、この先消える可能性が非常に高いと考えられる。その原因の一つは、日本語には表音文字の仮名があるに対し、中国語には表形文字の漢字しか存在しない。音訳借用語は漢字だけで語彙の意味を判断することはほぼ不可能のため、借用語の伝播・定着にも不利な影響を与える可能性が高いと予測できる。

第 4 章ではまず、ビリビリ動画を中心として Web コメントコーパスを作成し、現在実際に使われている日本語借用語を 150 語抽出した。また、抽出した借用語を分析対象として意味の対照研究を試み、そのメカニズムを解明した。結果として、日本語から借用された語の殆どは日本語の意味のそのまま維持してきたことがわかる。そして意味変化が起こった借用語を大きく「意味が類似する」、「意味の差異が大きい」、「意味が全く異なる」という三つのタイプに分けた。更にその意味変化の原因についてその言語の内的要因を「意味拡張」、「意味縮小」、「意味良性化」、「意味悪化」の四つの視点から借用語の意味変化を分析した。最後は意味変化を引き起こす認知的要因としてメタファーとメトニミーの概念を利用し、日本語借用語の意味変化のメカニズムを明らかにした。意味変化が起こった日本

語借用語は特定の社会集団で新たな意味が発生し、その発生した意味が頻用され、その意味が変化しながら定着していくと考えられる。

第5章において、「逆襲」について、語の出自・由来を明らかにしてその類義語「反败为胜」との関連性について論じた。「勝利を勝ち取る結果」という点において、「逆襲」は「反败为胜」と異なる。「反败为胜」は勝負事に関わる限られた場面しか使われず、それ以外の場面で使うと、多少不自然が生じうる。一方、「逆襲」は勝負事以外、あらゆる場面で使用できるので、類義語の「反败为胜」より使いやすくなる。また、「反败为胜」は成語（四字熟語）のため、一般の二字語彙と比べて単語としての統辞機能に極めて制約があるに対し、「逆襲」の使用はかなり自由度が高い。そして、「逆襲」のような今までの既存の概念を表す借用語とこれまで使われていた中国語語彙の類義語との間の関係を分析することで、借用語の機能や役割を明らかにした。

第6章では、まず Web コメントコーパスから抽出した日本語借用語を分析対象として、その文法機能としての品詞機能について考察した。対象となる借用語には名詞が最も多いと指摘した。次は名詞転換動詞という現象について分析し、また Web コメントコーパスにおける語例を調査することで、ほとんど名詞転換動詞は名詞のクオリア構造の目的役割と主体役割を利用して作られたということも指摘した。そして、先行研究で既に紹介した「目的による転換」、「方式（道具）による転換」、「結果状態による転換」、「場所による転換」以外に、「感覚による転換」という新しい名詞転換動詞の分類を取り上げた。名詞転換動詞は中国語においてよく見られる現象であり、名詞から動詞への変化に伴い、意味の変化も生じうる。日本語借用語のメカニズムを明らかにしてその特徴をまとめるのがとても重要であると考えている。

第7章では、準接辞とみなす現象を再検討し、日本語借用語における一般の接辞から区別され、内容語から接辞（機能語）へと変化する文法化の過程にある中間的な構成成分であると述べた。また、文法化は漸次性を持つものであるため、内容語と機能語の間にも連続性を認めつつ、明確に区別する基準を求めなければならないということを述べた。次は文法化と借用の関係について、「借用の段階で起こる文法化現象。主に「文法の複製」によって引き起こされる」と「派生の段階で起こる文法化現象。主に「意味の漂白」によって引き起こされる」の二つのパターンに分けて検討した。更に、「文法の複製」や「意味の漂白」を準接辞と文法化の度合いとの関係の判断基準として、現代中国語の新語における日本語からの借用語について分析し、「文法の複製」によって引き起こされた文法化は「意味の漂白」より文法化の度合いが高いと主張する。最後、準接辞は依然として内容語とする機能を保っているため、単なる語の新しい意味としても扱えるかもしれないが、意味の漂白という文法化の特性が現れたので、準接辞として考えることは妥当であると述べた。また日本語借用語

(準接辞)の持つ意味が語彙的な意味から文法的な意味へ発展するいわゆる文法化の度合いが高くなるにつれ、定着度が高くなると考えられる。

第3部では、言語接触による日本語借用語について考察した。第8章では、言語接触の観点から現代中国語の新語における日本語からの借用語を分析した。まず、インターネットの普及を背景として、日本語からの借用語を「即時性」、「広域性」、「不安定性」、「低年齢化」の四つの特徴に分類した。更に日本語借用語の流行する原因を明らかにした。次は、借用語と文化について、特にACG文化を代表とする日本文化が世界へ発信されることを背景として、語例を挙げながら現代中国語の新語における日本語からの借用語と日本文化の関係を分析した。その結果、ACG文化を代表とする日本文化の受容により、中国の若者の言葉様式が大きく変化したことが分かった。最後は集団語の一種である若者言葉と流行語の観点から若者言葉における日本語借用語の定着問題を分析した。この時期の借用語は若者層を中心として利用されているため、借用語の数が急増する一方、定着度の低い借用語が廃語になる可能性が高くなり、かなり不安定である。若者言葉としての定着の特徴として主に「使用場面が広い」と「暗号的すぎるものではない」の二点を指摘している。

第9章では、現代中国語の新語における日本語からの借用語の代表例である「宅」という語を対象として使用状況や意味拡張を分析し、基本語化の要因を分析した。「宅」は元々「住所」を意味する一方、近年日本語の「お宅」の影響により、「家に引きこもる」に拡張された。また、「宅」という語は本来の名詞として用いられるのみならず、動詞や形容詞としても用いられるようになってきている。さらに準接辞としての用法もある。また、「宅」の基本語化の要因に関しては、主に社会・文化的、言語・心理的な要因があると考えられる。

終章では、本論文のまとめとして、本研究の意義および今後の課題を述べた。現代中国語の新語における日本語からの借用は近代中国語の借用語と比べて、共通的な特徴がある一方、異なる部分も少なくない。2000年以降、科学技術の発展やインターネットの普及により、大きな変革が起こった。その変革は生活面にとどまらず、言語面にも大きな影響を与えた。このような背景の下で、言語は、近代はもとより、たとえ20年前の20世紀90年代ですら比べられないほど大きく変わっている。したがって、現時期の借用語がどんな特徴を持っているのか、人々の言語生活がどれほど影響されているのかを一般言語学と社会言語学の両方から分析することは極めて重要な意義があると思われる。

本論文はこれまで研究対象とされていなかった新語にあたる日本語借用語を研究対象として、形態的特徴、統合的特徴、意味的特徴の様々な視点から、その創造過程、伝播過程および使用状況などを系統的に考察したことで、日本語借用語の誕生や使用における言語の内的要因と外的要因を把握し、現時点で新語として使われる日本語借用語がこの先どれほど中国語に完全に定着し、いわゆる借用語の定着率の予測に繋がることが期待される。